

古代文学の課題と方法

○ 上代文学の研究で文献依存の方法はやがては限界が来よう。そこで研究を足踏みさせぬためには、周りの学問を活用するに如かず、就中戦後に目覚しい躍進を示す考古学の進歩と業績に、民俗学以上の期待が持たれる。

(市村 宏)

○ 「古代文学の研究はもう尽くされた」という意味のことを、折口先生から親しく伺ったことがある。万葉研究で言えば、編纂者についての突込んだ考証や、中国詩文との比較の成果や、さては略体・非略体を鍵とする問題などもなかった時代である。既に行くところまで行った筈の課題にも、まだ将来があったのである。それだけに、新資料の発見を最大の関心事としている近世文学研究の世界などからみれば、主題を置き忘れて隣家の畠を耕しているような古代文学研究の多くの傾向——歴史や文化人類学や中には統計学まで持ち出している風景は不思議に見えるかも知れ

ない。さて、その収獲といっても蓋然説で終つてしまふことさえ多い。私たちはそれでも失望しない。ある発生源を二方向からの探知によつて求める科学的手段でさえ、一方向からの探知だけなら、蓋然説に等しい価値しか持たない。もし複数手段で同じ推定論がいくつも出たら、それはもう真理であると言つてよからう。どうであらうか。

(大久間喜一郎)

○ 私は自分自身が関心をもつており、この方面の研究が今より一層推進せらるべきものと思ふものを三つ掲げる。

第一は古代文学と中国文学との比較研究である。すでに小島、中西両博士の卓越した研究があり、その他の諸学者も研究をしておられるが、すべての古代文学研究者は勞をいとわず中国古典を研究し、又日本古典の文章を更に精査すべきだと思ふ。

第二に上代日本漢文学の研究である。広義の古代文学に包含されている日本漢文学の研

究も必須条件だと思ふ。

第三に古代庶民生活史の研究である。古代庶民生活の物心二面の実相を知ることである。万葉集、風土記、日本靈異記等の研究とともに、古代の宗教、法制、住居、墳墓、農耕、狩猟、漁業その他、風俗習慣等の研究のため関係諸学科の調査が必要だと思ふ。

(緒方 惟精)

○ テーマを「古代文学研究の課題と方法」と解釈します。古代文学研究の方向は、大別して二つあるように思います。古代文学そのものの客観的研究と、現代という時点からその解釈なり評価です。前者は、とかく木を見て森を見ず、後者は、とかく主観批評に流れやすいようです。しかも互いになかなか相手を正當に認め合わないのではないでしょう。膨大な古代文学が研究対象となれば、個々の研究者の関心なり方法なりは当然千差万別、そこに価値の上下はないと思います。そこで当面の課題は、分業化されつづいた研究の、夫々の分野に於ける体系化と、各分野の統合とを考ふる事にあるようです。その為には、研究者達が互いに積み上げの可能な形の業績を築き合い、自由な情報の交換と、強力

な共同研究の場を作り上げる必要があるのではないだろうか。「近代文学館」が完成した現在、そのような場として「古代文学館」ができて悪くはないと思えますが……。

(木下 玉枝)

○ 従来の日本神話の研究方法の主なるものと言えば、津田史学によって大成された歴史主義的方法、松村武雄氏「日本神話の研究」に代表される神話学的方法、柳田折、口両氏によって拓かれた民俗学的方法の三つがあげられる。もちろんこれらによって得られた成果は少なくないが、歴史を軸として神話を外縁から適宜取捨選択し価値づけるやり方や、神話を分析し個々のモチーフについて祭式との関連を探るやり方だけでは、どうしても限界があるようである。分析もさることながら、古事記なら古事記神話の全体的構造そのものがあるがままに俯瞰し把握すること、同時にその構造を支えている祭式的思考ないしは神話的世界観を探り出すことが必要不可欠なのではないか。全体的構造の把握を志向することなくしては分析はついに分析に終り実体の真の把握には至らない。全体的構造を志向した上で分析を試みるために、その方法を摸索

中である。

(倉塚 嘩子)

○ ごく些細な点に自分の特徴を示しあひながら、それを独創だと錯覚して、お互い同志が違っていることに慰めを見出だしているのが、世の多くの作家群ではなからうか——こんな文壇批評がもう十年も前にあったような気がする。一読者の眼をもって見た今日の小説の氾濫ぶりにも、その感をますます深くする。読者は溺れさせられているのではないか。

○ あくまでも概感である。古代文学に関する研究書の新刊が近頃多い。しかし手にしてみるとがっかりする。高価であるからばかりではない。古代研究を初めて読んだ時のような衝動を起させないからである。研究上徹底的ではあらねばならぬであろう。しかし文学研究であるからには、その作品の文学性やその論者の文学観が巨視的に現われていてしかるべきではないか。

○ 溺れるのは自分に泳ぎきる力がないからである。感動しえないのは理解力がないからであろう。そして弱輩の放言は可愛気もない。

(高橋 六二)

○ 「日本文学」1966年9月号で、西郷信綱氏は古事記の神話として共時論的方法で研究すべきであるとし、神話の言語は、「その発せられた世界や、それに固有な社会的・心理的文脈」に即して解釈すべきであるといわれている。

○ 古事記の神話を共時論的方法で研究し、理解すべきであることに異論はないとしても、その時代と現代との時間的障壁を克服して、それぞれの神話がいかなる社会的・心理的情況の中で成立したかをつきとめることは容易ではない。

○ たとえば、記紀両書にわたる多くの異伝をどのように位置づけるかも、一つの課題である。ある神話がいくつもの異伝をもつということは、その神話が社会的心理的に人々(具體的には氏族集団など)にとつて、利害的な関心事であったからに他ならない。この間の事情を解明することも、神話が意図していた本質の究明に通ずるであろう。

(戸谷 高明)

○ 文字が人間の生活を伝えた年代よりもさらに長い「古代」は、想像を絶する悠久の歴史

であった。従つてそこには、興味溢れる課題があまりにも多い。それにもかかわらず、研究の手がかりは乏しく、「古代」の語はむしろ不明不可解の意の代名詞ともなっている。しかしそれだからこそ、私もそこには限りない探求の魅惑を感ずるのでということもできようか。古代を対象とするさまざまな学問方法が試みられるのはそのためであろう。ただ、どんな学問方法に拠る場合でも重要なのは、乏しい資料と資料とをつないでいく想像力であろう。ところで、想像は自由である。推理は楽しい。これからの古代学は、それらの想像や推理を、共同の場で披瀝し協調し合つてこそ、さらに大きな興味となり、ひいてはその研究成果が期待されるのではないでしようか。

(長瀬 治)

○ もっとも基本的な、したがって何を言つても解決は得られないだろうと思われこれについて、今は二つのことを言つてみたい。

○ 第一は本當の解釈が、無いのではないかという事である。たとえば万葉集の一首一首の歌はいろいろに言葉が分析されているけれども、しからはその歌はどういう文学なのかと

○ いう事については、研究は徹々たるものであるような気がする。広い文学論は聞々見うけるが、その脆弱さを救う方法として、もっと一々の作品を解釈するという課題が、残されているように思う。

○ 第二に古典の伝統が現代文化の中に死滅しているのではないかという事がある。万葉という名だけを愛する教養人は、まだましな方だろう。そして研究者が学問の名の下に、それを助長している面もある。極論すれば、研究者は学問の純粹さを放棄しても、古代文学を今日に生かすべきである。大衆化を方法として、この重大な課題を乗り越えるべきではないか。

(中西 進)

○ 古事記や万葉集が「文学」かどうかはわからない。日本人の99・99%は余り面白がっていないのは事実であろう。にも不拘、文学という名を与えているのは文学の教授や、その志望者の幸福な意識ではなからうか。その人達にしたって、或は帝国主義的欲望共同体であり、或は資本主義的欲望共同体の中に生きなければならぬから、折角の「古代文学」の方法と課題だつて、身丈に合った衣装でしかないだろう。多分、人類の純粹な意識が持

つ目からは、虚妄の確信にすぎないのではなからうか。それが虚妄ほどでないと受取られているのは月給と交換出来るからである。

○ 古代文学に限らず、課題と方法というものは、それが文学であれば、論文そのもので果すより方法のないものである。論文そのものが課題であり、方法である訳である。

○ だから、課題と方法とは、要するに生まれつきのことである。

(渡部 和雄)